

# 小豆「壬生大納言（仮称）」の特性と栽培法について

## 1 試験のねらい

本県における小豆品種・大納言の諸特性を把握し、品種選定を行い、さらに、その栽培法について検討を行った。

## 2 試験方法

試験は農試本場転換畑（中粗粒灰色低地土、灰褐系、麦跡）で実施した。

昭和58年は、壬生3系統、大田原2系統、アカネダイナゴン、岩手大納言、京都大納言及び中納言（長野）の9品種（系統）について品種比較を行った。

昭和59年は、58年に有望であった壬生1・壬生3及び京都大納言について、それぞれ5個体を選抜し、品種比較を行った。

昭和60年は、59年に有望であった壬生1-5・壬生1-10・壬生3-10及び京都大納言について品種比較を行った。

昭和61年及び62年は、壬生1-10について、播種期、栽植密度、窒素基肥量及び窒素追肥量を検討した。

## 3 試験結果及び考察

表-1に昭和60年の結果を示した。成熟期は壬生1-10が10月26日、壬生3-10が11月2日であり、京都大納言は成熟に至らなかった。分枝数及び莢数は、壬生3-10が多かった。一莢内粒数は、京都大納言が少なく、他の2系統は同程度であった。子実重は、壬生1-10が2.54kg/aと最も多収で、次いで壬生3-10であり、京都大納言は最も低収であった。千粒重は、壬生3-10が最も重く、次いで京都大納言、壬生1-10の順であった。

図-1～4に昭和61～62年の結果を示した。

播種期は、6月下旬から7月中旬まで子実重に差は認められなかったが、6月下旬播きで千粒重が低下したため、7月上旬～中旬が適していると推察された。

栽植密度は、 $\text{m}^2$ 当たり8.3株までは密植ほど多収の傾向が認められたが、それ以上の密植しても子実重は変わらないため、 $\text{m}^2$ 当たり8.3株が適当と考えられた。

基肥の窒素施肥量について検討した結果、a当たり0.2～0.4kgの間では差は認められず、窒素はa当たり0.2kgで十分と考えられた。

開花期の窒素追肥について検討した結果、追肥をすることにより稔実莢数及び千粒重が増加し、子実重が増加した。追肥量は、a当たり0.5kgが適当と推察された。

## 4 成果の要約

壬生町で栽培されている大納言について、系統選抜を行い、壬生1-10及び壬生3-10を選定した。さらに、壬生1-10について栽培法を検討した結果、播種期は7月上旬～中旬が、栽植密度は8.3株/ $\text{m}^2$ が、窒素施肥量は基肥0.2kg/a及び開花期の追肥0.5kg/aが適当と推察された。

（担当者 作物部 前波健二郎\*）

\*現普及教育課

表-1 生育収量調査(昭和60年)

調査 品種系統名	発芽	開花	成熟期	倒伏	ウイルス病 の程度	主茎 長	主茎 節数	分岐 数	稔実 数	一 莢子 粒重	子実 重	千粒 重	品質
	の 不良	期 月	期 日	期 日	程 度	%	cm	節 本/株	個/株	粒 kg/a	g	g	
壬生 1-10	良	8.25	10.26	4.0	3.3	57	17.1	7.6	49.9	8.2	25.4	204	やや上
壬生 3-10	良	8.27	11.2	3.5	5.0	60	17.9	9.1	61.9	8.4	23.4	221	中
京都大納言	良	8.30	至らず	3.5	6.7	60	17.7	7.9	45.1	6.9	20.8	210	中

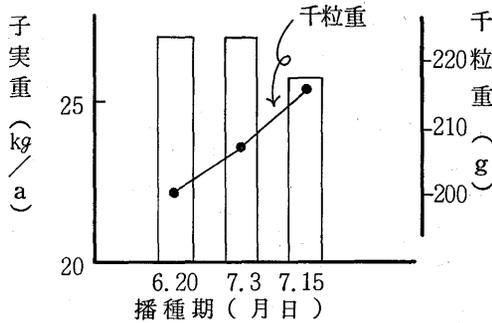


図-1 播種期と子実重及び千粒重(昭61)

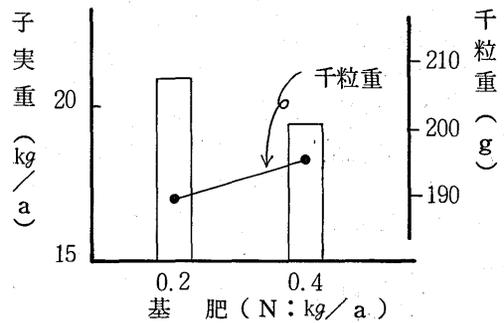


図-2 基肥と子実重及び千粒重(昭62)

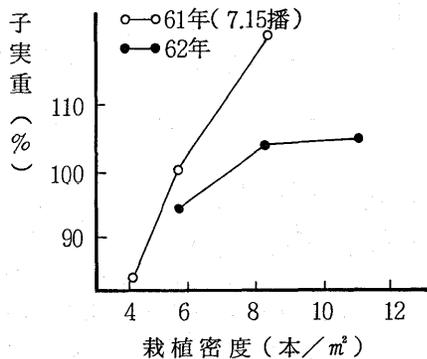


図-3 栽植密度と子実重(子実重はその年の平均を100とした指数)

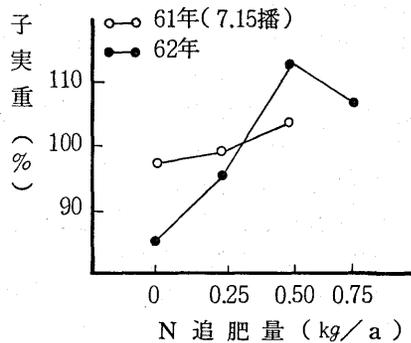


図-4 N追肥量と子実重(子実重はその年の平均を100とした指数)